

胸腺上皮性腫瘍WHO分類についての検討

著者	小貫 琢哉, 山本 達生, 中村 亮太, 小澤 雄一郎, 薄井 真悟, 酒井 光昭, 石川 成美, 鬼塚 正孝, 榊原 謙, 南 優子, 飯嶋 達生, 野口 雅之
雑誌名	日本呼吸器外科学会雑誌
巻	17
号	3
ページ	329
発行年	2003-04-01
権利	日本呼吸器外科学会
URL	http://hdl.handle.net/2241/00134969

P-001 胸腺上皮性腫瘍 WHO分類についての検討

¹筑波大学 附属病院 呼吸器外科, ²同大学 臨床医学系 外科, ³同大学院 医学研究科, ⁴同大学 基礎医学系 病理

小貫 琢哉¹, 山本 達生², 中村 亮太¹, 小澤 雄一郎¹,
薄井 真悟¹, 酒井 光昭¹, 石川 成美², 鬼塚 正孝²,
榊原 謙², 南 優子³, 飯嶋 達生⁴, 野口 雅之⁴

【背景】近年、胸腺上皮性腫瘍 WHO分類の臨床上的有用性が検討されている。当院の症例を WHO分類で再評価し、臨床上的有用性を検討した。【対象と方法】1988年3月～2002年12月までに病理学的に診断された胸腺上皮性腫瘍70例（男41, 女29）、年齢19～76歳（平均54歳）、平均観察期間72ヶ月、重症筋無力症（MG）合併22例、胸腺腫60例の正岡分類内訳はI・21例、II・23例、III・11例、IV・5例、これをWHO分類で再分類し、正岡分類との比較、MG合併との関係、周囲臓浸潤の有無を検討。【結果】WHO分類の内訳はType A・7例、AB・13例、B1・11例、B2・13例、B3・13例、C・10例、分類不能3例。症例を<1>Type A, AB, B1群と<2>Type B2, B3, C群分けると、<1>の臨床病期は早期が多かった。<2>は周囲臓浸潤が多かった。それぞれ $p < 0.001$ 。WHO分類とMG合併に関連性はなかった。胸腺腫術後再発はType B3の3例、死亡例はType Cの4例。【結語】WHO分類は臨床所見、病期と強く関連し臨床的に有用と考えられた。